

タイトル「代わりの女」 松島寛和

登場人物

係長

マユミ

橋本くん

オフィス街。

大きなビル。

その1階ロビーで。

係長が電話をしている。

係長

はい、はい、そうなんです。もう、待ち合わせの時間がすぎてるのに、来ないんです、橋本くん。

ギャルっぽい服装の若い女（マユミ）が現れる。

係長

（電話に）ええ、もう先方のビルのロビーです。ここで待ち合わせですから。

彼は別件で朝から直行予定ですからね、顔を見てないんですよ。今日はまだ。

（深くため息）今日のコンペは彼のプレゼンにかかってますからね。

（時計を見て）彼はそもそも、時間には律儀なところがありますからね。

今の時点できてないというのはおかしいですよ。

……やっぱりね。昨日の、あれ、飲み過ぎなんですよ。あきららかに。

前日祝いだとか言って、調子に乗るから。

いや、別に部長のせいだなんて、そんなことを言いたいんじゃないよ。

確かに、誘ったのは部長ですが

これは、飲みすぎた彼が悪いんですよ。

なんで飲むかなあ……大事なプレゼンの前日にあんなガバガバと。

どうしましょうか。このまま来なかったらアウトですよ。

電話、ですか。

かけてるんですけどね、電波の届かないところにあるか、電源が入っていないって言うんですよね。

マユミがじっと見ているのに気が付く。

係長、目をそらすように背中を向ける。

係長　とにかく、待つしかありませんけどね、  
はい、最悪の場合は、私がプレゼンするしかないと思ってます。  
まあ、原稿は何度も見てますし、練習にも付き合いましたので。  
（マユミが回り込んで覗き込む）わ！　あ、いや、あの。  
とにかく、部長に、いいご報告ができるようにがんばりますんで。  
失礼します。

（マユミに）……なんですか？

マユミ　あの。

係長　はい。

マユミ　待ち合わせですか？

係長　……そうですね。なにか？

マユミ　あの。もしかして。

係長　……はい。

マユミ　係長さんですよ。

係長　わたしですか？

マユミ　はい。

係長　そう……ですね。確かに係長ですけど……あの、なんですか？　わたしに何か用ですか？

マユミ　その、係長さんがいま待ち合わせてる、その相手ですけど、多分きません。

係長　え？

マユミ　こないんです。

係長　こない？　なんで？

マユミ　なんでって。二日酔いです。

係長　うそだよ！

マユミ　うそじゃないです。本当です。すいません。

係長　すいませんって……そりゃそうだよ。飲んでたもん。コップの冷酒をガブガブ飲んでたもん。

マユミ　飲んでましたか。

係長　一晩寝たら大丈夫です！　とか言っつき。そんなわけないよね。一人で1升ちかく飲んでたから。あれがお茶だとしてもそんなに飲めないよ。

マユミ　1升も飲みましたか……。どうして止めなかったんですか。

係長　止めたかったよ。止めなきゃ、と思っただけど。止まんないんだもん。あいつがあんなに酒癖悪いとは思わなかった。飲んで、騒いで、それで大事な仕事を休んじゃったら話にならんよ。

マユミ そうですね。

係長 そうですねって、あなた……うーん、その、あなたは一体、どこのどなたですか。

マユミ え？

係長 なんか、驚いた勢いでいろいろ言ってしまったが、なぜあなたがそのことを知ってるのかなと思ひまして。

マユミ それは、わたしが彼の彼女だからです。

係長 彼女……。それで、伝えにきたんだ。二日酔いでこれないということ。

マユミ そうなんです。すいません。

係長 (頭を抱える) あいつ何考えてるんだ……。

(時計を見て) あ、やばい。あの、今日はわざわざお伝えいただいてありがとうございます。

マユミ (行こうとする係長を引き止めて) あの。

係長 なんですか。

マユミ あの、ご提案があるんですが。

係長 ちょっと、わたし、あまり時間がないんですが。

マユミ 今日のプレゼンなんですけど、係長がやりますか？

係長 え？

マユミ 彼がやるはずだったんですよ。係長は本来ならば、彼のプレゼンを横で黙って見ているだけの役なんですよね。

係長 ……言い方が多少ひっかかりますけど、まあ、そうですね。

マユミ できますか？ プレゼン。

係長 ……やるっきゃないでしょう。

マユミ ほんとにできます？

係長 あのね、だから早く一人になって資料を読み返さなきゃなんんですよ。何か用があるならサクッと行ってくださいよ、サクッと。

マユミ よろしければ、そのプレゼン、あたしが引き受けます。

係長 え？

マユミ あたし、そのためにきたんです。彼の代役です。あたし。

係長 だいやく？

マユミ あたしにドーンと任せてください。

係長 ドーン。

マユミ もう間も無いですよね。プレゼン。早速行きましょう。

係長 (行こうとするマユミに) ちょっと待って。あの、あなた、何？

マユミ 彼の代役です。

係長 だから、なぜあなたが代役を。

マユミ わたしが、彼の、彼女だからです。

係長 彼女だから代役をするってこと？

マユミ はい。……では、行きましょう。

係長 (止めて) 待って待って。

マユミ なんてしよう。

係長 だからなんで、あなたが代役をするんですか。

マユミ わたしが彼の彼女だからですよ。

係長 話がグルグル回ってる。そういうことが聞きたいんじゃない。

マユミ 何が聞きたいんですか。もう時間がないですよ。

係長 時間がないのはわかっていますよ。でも、代役やりますと言われて、はいそうですか、というわけにはいかないでしょう。

マユミ 係長はわたしが代役を務めるのが不安なんですか？

係長 そりゃ、まあ、ね、あなたのような派手な娘さんがきて、その、プレゼンあたしに

任せてくださいと突然に言われて、不安かどうかと聞かれたら、そりゃ不安ですよ。

マユミ プレゼンできますよ。あたし。

係長 どうしてそんなに言い切れるの。自信があるわけ？

マユミ 自信なんてないですよ。でも、あたしも、やるしかなかったんです。あたし、めっちゃめっちゃ練習したんですよ。彼が朝5時に帰ってきて……。

係長 え。5時？ 解散したのは12時だったよ。

マユミ 一人で飲んでたんでしょう。そういう人なんです。新聞配達と同じ時間に帰ってきて、布団に寝転ぶなり、やばい、今日無理、って言って。あたしも毎日彼と暮らして、今日が大事なプレゼンだっていうのは知ってましたから。どうすんの？って聞いたら、代わりにお前行ってくれるか？って。

係長 それで来たんですか。

マユミ はい。それであたし、本気でやらなきゃと思って、ものすごい練習したんです。

係長 そんな……お前行ってくれるかって、そんな軽いノリで言われても。

マユミ ノリが軽いとダメですか？

係長 ダメっていうか、まあ……ダメだよねえ。

マユミ ダメでしょうか。

係長 ダメだよ。

マユミ 確かに、ノリは軽かったかもしれませんが。それでもあたしは本気なんです。

係長 この場合本気かどうかはあまり関係がないよ。

マユミ 聞いてください。あたし、今朝彼が帰ってきて、二日酔いでダメだと言ったとき、これはあたしの出番なんだって思ったんです。彼が頑張ってきたプレゼンをなんとか最後までやり遂げたい。それで、あたし本気で特訓しました。猛特訓です。だから早く係長にもあたしの本気を見て欲しい。あたし、彼が家でプレゼンの練習しているとところを見ました。それを踏まえた上で、もしかしたらあたし、彼よりうま

係長 くやれてるかもしれません。係長。  
はい。

マユミ コンペ、かならず取りましょう。あたしを信じてください。

係長 信じる……。

マユミ ……信じてもらえないんですか？

係長 うーん、気持ちは伝わったけどね。だけど。

マユミ 何を悩んでるんですか。こうしている間にも刻々と時間が迫ってきてますよ。どう

するんですか。だったら係長がやりますか？ できるんですか、係長に。

係長 いや、あの、できるかどうかと聞かれたら、それはちよつと答えにくいものがある  
けど。

マユミ 私を信じてください。役に立ちたくてきてるんで。本気なんで。

係長 わかった、わかった。わかったけどさ。その。

マユミ なんですか。

係長 その、ちよつと、うーん……格好がなー。

マユミ 格好、ですか。

係長 今風っぽいというか、ちよつとカジュアルすぎるといふか。ビジネスの現場には似  
つかわしくないといふか。

マユミ でも、彼は似合ってるって言ってくれます。

係長 彼はそういうかもしれないね。でも、取引先は彼氏じゃないからね。

マユミ だめですか？

係長 とりあえず、君ではなくて、彼と話はできませんか。本人から聞かないと話が見え  
てこないから。

マユミ 話できないと思います。彼は寝たら起きないんで。

係長 でも、私が電話したら出るんじゃないのかな。

マユミ あたしのラインならまだしも、係長さんの電話じゃ無理ですね。

係長 ……だって、わたしは彼の上司だよ。

マユミ あたしは彼女ですけど……。

係長 失礼して(携帯をかける) ……(呟きで)頼む、橋本くん、出てくれ。……。

マユミ 出ませんか。

係長 ……(電話を切る)。

マユミ ほつとしました。

係長 ほつとしちゃダメなんですよ。これは。

マユミ とにかく、彼は来ませんよ。来ないんです。

係長 そんな意地悪言わないでよ。

マユミ わたしは練習してきてます。係長、ここは二つに一つですよ。あたしと行くか、そ  
れとも諦めるか。

係長 うーむ。

マユミ さあ、選んでください。どうしますか。あきらめるんですか。今日のプレゼンに向けて、たくさんの人たちが一生懸命、プランを練ってきたんじゃないんですか。それを、こんなことで台無しにするんですか。さあ、係長。決めてください。

係長 ……わたしは、なぜこんなに追い込まれているんだ？

マユミ わたしを信じてください。かならず結果を出しますから。

係長 ……わかりました。わかりましたが、やっぱり、その格好はまずいよ……。それ、ギャルだもん。キャバクラの同伴じゃないんだから。

マユミ どうしてもダメですか……この格好じゃ。

係長 ダメだよー。

マユミ あたしも、この服、趣味じゃないんです。

係長 着せられてんのか。

マユミ ツーポーズ、用意してます。(カバンから丸まったブラウスを無造作に取り出す)

係長 くっしやくしゃじゃねえか。

マユミ スーツもあるんで。そのトイレで着替えてきます。

係長 はい。……プレゼン、本当に大丈夫なんですね。

マユミ 大丈夫です。

係長 わかりました。信じましょう。とりあえず急いで着替えてきてください。

マユミ 承知しました。行ってまいります。

マユミ、退場。

係長、マユミを見送る。

少し思案して携帯を取り出す。

係長 (電話に) あ、部長。はい、お疲れ様です。

あの、あ、はい。もうすぐ始まります。

ええ、それが……実は、予想を大幅に上回る事がおきておりました。

はい、あの、橋本くんが、来れなくなつたようですよ。

ええ、二日酔いです。二日酔い。

そりゃそうですよ。あんだけ飲んだらね。

いや、彼から直接聞いたわけじゃないんですが……。

それが、説明するとなかなか難しいんですが、代役と名乗る女性がおりました。その判断を、なかなか私一人では決められませんので……

橋本が現れる。

係長 (橋本を見て) おわ! おわ! 橋本くん! (電話を切る)

橋本 係長、お待たせしました。すいません。

係長 橋本くん! お待たせしましたじゃないよ! ……部長の電話を切ってしまったじゃないか!

橋本 ……はあ、すいません。

係長 君はいつたい今までなにをやってたんだ!

橋本 すいません、前の打ち合わせが長引いたもので。

係長 前の打ち合わせが長引いた?

橋本 はい……。

係長 二日酔いじゃなかったのか?

橋本 何言ってるんですか。一晩寝たら大丈夫だって言ったじゃないですか。

係長 でも、すごい量を飲んだだろう。あれは多分、日本酒だけで1升は行ってたよ。

橋本 確かに、ずいぶんな量をいただきましたが、あれはほとんど部長が飲んでたんです。

係長 え? 部長が?

橋本 そうですよ。だって今日は大事なプレゼンじゃないですか。そんなハメを外して飲めないですよ。一応、私なりに注意して飲んでたんですから。

係長 そう、だよねえ。あー、よかった。ほっとした。

橋本 ほっとしただなんて大袈裟じゃないですか。どうしたんですか。

係長 いや、わたしは、君がこないと思ってね、もう、胃袋がきゅーっとなるような気持ちだったんだけど。

橋本 どうしてほくが来ないなんて思うんですか。

係長 だって、君の彼女がさ。ここにきて言うんだもん。

橋本 私の彼女?

係長 そうだよ。なんか、見た目が派手で、ものすごく押し強い君の彼女。

橋本 係長、それは誰かと間違ってますね。

係長 なにが。

橋本 だって、私、彼女はおりません。

係長 彼女がいない?

橋本 はい。

係長 それは……そんなことはないだろう。君には彼女がいるはずだ。

橋本 いませんよ。

係長 じゃあ、さっきまでここにいたあの女性は、一体誰なんだ。

そこにスーツに着替えたマユミが現れる。  
が、メイクはギャルのまま。

マユミ お待たせしました。これでどうですか。

係長 ああ……うん。着替えてくれてありがとう。うん、確かにスーツに着替えてくれるね。……でも、メイクと髪型がそのままじゃなあ。首から上と服装のバランスがおかしいことになってるじゃないか。ねえ、橋本くん。

橋本 ええ……そうですね。

係長 ねえ、この子なんだけどね。この子、君、知ってる？

橋本 いいえ。

係長 (マユミに) じゃあ、あなたは誰なの。

マユミ ……係長さんは、ニコニコ産業の係長さんじゃないんですか？

係長 我々は、ニコニコ産業さんでは、ないですね。

マユミ やっぱええ！ 間違ったかも！

橋本 間違った……。

係長 ……間違ったということは。……ははーん、なるほど。そういうことか。

橋本 係長、こちらの女性は……。

係長 こちらは……。多分、ニコニコ産業さんのプレゼンをするためにこちらへいらっしやってるんだ。

橋本 (名刺を取り出しマユミに) 初めまして。ニュートラル物産の橋本です。

マユミ (名刺を受け取りながら) マユミです。すいません。名刺を持ち合わせておりませんので。

橋本 それで……係長、これは一体。

係長 (考えながら) いやね、橋本くん、さっきまで私が陥っていたピンチは、私たちのピンチではなく、ニコニコ産業のピンチだったということだよ。

橋本 ピンチ、ですか。

係長 つまりな……。この話、ややこしいから会社へ戻るときに説明するよ。いくぞ。

橋本 はあ。あの、でも、こちらの女性は、我々と一緒に行くんじゃないんですか？

係長 一緒に行くんじゃないの。この人はこの人で、別の用件なの。

橋本 はあ。(マユミを気にしている)

係長 おい、何をしてるんだ。早くしないと遅れてしまうぞ。

マユミ 係長さん。

係長 橋本くん。行くよ。

マユミ 係長さんってば。あの、あたしのプレゼンはどうなるんですか。

係長 どうなるって、わたしにはわからないよ。

マユミ プレゼン、見てもらえないんでしょうか。それじゃ困ります。あたしこのままじゃ帰れません。

係長 そんなの、私に言われても困るな。

マユミ じゃ、誰に言えばいいんですか？ 頼りになるのは係長だけじゃないですか。お願



いですから力になってください。せっかく知り合ったご縁じゃないですか。

係長 いや、ねえ。気の毒だとは思いますが、だからといって私にできることはないよ。

マユミ そんな。

係長 そろそろ時間だから。失礼しますよ。

マユミ ちょっと待ってください。なんとか、どうにかして、ニコニコ産業のプレゼンを見てもらえないでしょうか。

係長 私たちに？

マユミ 違いますよ！ 何言ってるんですか！ クライアントにですよ。

係長 ああ、そうか。そりゃそうだ。

マユミ 係長さんのお力で、なんとか、クライアント様にお取次いただいて、私のプレゼンにチャンスをお願います！

係長 できないよ！ そんなこと。

マユミ お願いします！

係長 できないって。

マユミ お願いします！

係長 ……。

マユミ お願いします！

係長 うーん。(橋本に) 困ったな、時間がないのに。どうしようね。

橋本 係長。

係長 なんだね。

橋本 彼女の力になりましょう。

係長 何を言ってるんだね君は。

橋本 係長から頼んでもらえませんか。クライアントに。

係長 なぜ君がそっち側につくんだ。

橋本 頼むべきだと思うからです。

マユミ お願いします！ お願いします！

係長 (橋本に耳打ち) 何言ってるんだ。橋本くん。そんなことできるわけじゃないか。だってそうだろう。どこの世界に、ライバル会社のプレゼンを助ける馬鹿がいるんだよ。

橋本 係長、でも、フェアじゃないじゃないですか。そんなのおれ、よくないと思います。

係長 橋本くん、フェアとかフェアじゃないとかじゃなくてね、相手はいま、二日酔いで寝てるんだよ。社会人として失格だろそれは。それも含めて実力のうちなんだよ。

残念だけど、ニコニコ産業は今回ダメだ。

橋本 そうでしょうか。本当の実力というのは、プランの中身のことを言うんじゃないでしょうか。

係長 あのね、わたしはここで君と議論をしている余裕はないんだよ。

橋本 係長、このままニコニコ産業さんがプレゼンすらもできないままだと、我々はプランの良さで勝ったというより、相手がただただ自滅しただけってことになるじゃないですか。そんな勝ち方じゃ、納得いきません。正々堂々と戦ってこの仕事を勝ち取りたいです。

係長 君もわからない人だな。いいか、今回のこの企画は大きな仕事なんだよ。君だってプレゼンの練習を重ねてきたじゃないか。たくさんの人の思いが、いま我々二人の肩に乗ってるんだよ。負けるわけにはいかないんだ。わかるね。

橋本 ……それはわかってます。

係長 確かに、フェアな勝ち方じゃないかもしれないよ。でもね、それで我々が勝って、クライアントに不利益があるかね。我々のプランではクライアントの不利益になると思ってるのかね。

橋本 ……いえ、私たちのプランには自信があります。

係長 そうだな。よかった。そこでは私たちは一致している。だったら、私たちは私たちのことだけ考えればいいじゃないか。ねえ。

橋本 ……。

マユミ (割って入って) そんなのずるい。ずるいぞ。

係長 君は黙ってて。

マユミ 黙ってられないよ。だってそんなのずるいじゃん。ずるいよ。ずるいー、(大声で) みなさーん、ここにいるこの二人はズルをしてプレゼン勝とうとしてまーす。

係長 静かにしなさい。ここは取引先のロビーだぞ。

マユミ 静かになんかするもんか！ そんな自分勝手な理屈、絶対許さないぞ！ だってそうじゃん。あんたんとこのプランがニコニコ産業のプランより優れてるってさあ、見てもないくせに、どうしてあんたにわかるんだよ。もしニコニコ産業のプランの方が優れてたらどうするんだ。それはクライアントの不利益なんじゃないのかよ！

橋本 ……係長。

係長 ……なんだね？

橋本 ……彼女の意見にも一理あります。

係長 うるさい。

マユミ あたしだってね、あたしだって、好きで覚えたんじゃないわよ、プレゼンの原稿なんて。あいつがやれて言うから覚えたんじゃない。大体ね、書いてあることのほとんど意味なんてわかってないわよ。それでもね、がんばったんじゃない。朝5時から繰り返し繰り返し練習して、さつきもその公園でなんども練習して、やっとできるようになったのに。それがなに。見てももらえないなんて。何様のつもりよ！ ひどすぎる。ひどすぎるじゃない！

係長 わかった…。わかったから静かにしてくれ。みんなが見てるぞ。

マユミ 静かにしないで！ 正当に見て、正当な評価を！

係長 わかった！ わかったよ！ どうしたらいいんだ！

マユミ 係長さんがあたしを先方に取り次いでくれたら、静かになってやってもいい。

係長 無茶言わないでよ。

橋本 係長。

係長 なんだ。

橋本 ぼくからもお願いします。彼女のこと頼んでもらえませんか。

係長 もう、君はどっちの味方なんだ。

橋本 このままプレゼンに行っても後味が悪いですよ。それに彼女が気の毒です。

係長 でも、どうやって頼めばいいんだ。

橋本 先方の担当者にお願いするだけしてみたらいいじゃないですか。彼女にチャンスを与えるかどうかは先方が決めることです。

係長 ……むむむ。

橋本 お願いします。

係長 わかった！（マユミに）話をするだけだぞ。もし断られても、わたしを恨むんじゃないぞ。

マユミ わかっています。

係長 ……試しに電話をしてみるだけだから。無理そうならすぐに引き上げるからな。マユミ ありがとうございます！

係長、電話を取り出す。

係長 （電話に）あ、もしもし。いつもお世話になっております。わたくしニュートラル物産のタカダと申します。はい。今、下までお伺いしてまして。ええ、実は……。

係長が電話している間

橋本とマユミが二人になる。

マユミ 橋本さん。

橋本 え。あ、はい。

マユミ どうもありがとう。

橋本 あ、いや、どういたしまして。

マユミ 橋本さんって優しいんですね。

橋本 いや、優しいっていうか、俺もさ、プレゼン担当だからさ。覚える大変さ、わかっているから。

マユミ そっか。それでか。それで味方になってくれたんだ。

橋本 お互い頑張ろうな。

マユミ うん。

橋本 その……彼氏とはどのくらい付き合ってるの？

マユミ ずいぶん長いかな。学生の時だから。もう腐れ縁みたいなもんですよ。

橋本 そうなんだ。長いんだ。でも、すごいね。

マユミ すごい？ なにが？

橋本 だって彼のためにプレゼンの役を引き受けるなんて。普通じゃ考えられないよ。

マユミ そうかな。

橋本 そうだよ。聞いたことないそんなの。

マユミ ……そうなのかもね。普通は。でもあたしたち、普通じゃないから。あたしたち、

一心同体っていうか。あたしは彼で、彼はあたしなんだ。学生時からそうだったの。あたしは彼の役やってきたし、逆に彼があたしの役になることもあるのよ。

あたしたちって、お互いに補い合ってるの。そういう関係。

橋本 ……そういう関係、ね。……よくわかんないけど。

マユミ ま、そりゃさ、人間だもん。機嫌悪い時は無視するし。実際、あたしの趣味って、

彼の趣味とは違うし。合わせて演じなきゃなんないのがしんどい時もあるけど。で

も、その分、私以外の人間になれるっていうか。それで新しい趣味が生まれたりす

ることもあるし。楽しいんだよね、その方が。

橋本 へえ……。そうなんだ。

マユミ 橋本さんは、どんな彼女とお付き合いしてるんですか？

橋本 え？

マユミ 橋本さん優しいから、彼女もほんわかしてて優しそうな人なのかな。

橋本 え、あ、どうかな。

マユミ 教えてくださいよ。どんな人？

橋本 あ、うん……ノーコメント。

マユミ なにそれ。いいじゃん、教えてよ。けち。……もし、彼氏が橋本さんみたいな人だ

ったら、付き合っても自然体でいられるかもしれないな。

橋本 そうかな。

マユミ うん。相手に合わせるんじゃないって、楽な感じで付き合えるような。それはそれで

楽しいのかもね。あたしたちみたいに束縛し合うようなんじゃないって。

橋本 あ、うん。

マユミ 羨ましいな。橋本さんの彼女。

橋本 そ、そうかな。

マユミ あたし、全力でやるね。彼のために。そして絶対勝つね。悪いけど。

橋本 ……あ、ああ。おれも頑張るよ。

係長、電話を切って戻ってくる。

係長 先方もニコニコ産業さんを心配していたそうだ。担当者さんに相談したらな、我々のプレゼンを後に回して、ニコニコ産業さんから先にプレゼンを受けるそうだ。

マユミ ありがとうございます！

橋本 よかったな。

マユミ うん！ ありがとうございます！（ふたりに向かって）本当にありがとうございました。このご恩は忘れません。では、行ってまいります。

マユミ、去る。

橋本、マユミの行った方を見つめている。

係長 橋本くん、君の言葉をいただいたよ。

橋本 （マユミの方を見ながら）わたしの言葉ですか。

係長 フェアじゃないってやつだよ。クライアントに好印象を持ってもらえるようにと思ってる。彼女を推薦するときには付け足した。そして、ニコニコ産業の担当者が二日酔いで倒れているというのもそれとなく挟んでおいたよ。それは嘘じゃないからな。あの子には気の毒だが、我々も負けるわけにはいかないからね。

橋本 二日酔い……。あの子の彼氏は二日酔いで仕事すっぱかしたんですか。

係長 そうなんだよ。馬鹿だろ。……いやあ、でもあの子。すごい子だったね。なんだかよくわからんが、勢いのある子だった。あんな子が我が社にいたら、もしかするとすごい案件をまとめてくるかもしれないね。

……はい。

橋本 （時計を見て）30分ほど時間ができたな。少し資料を読み直すか。

橋本 あの……あの子の彼氏って、二日酔いだったんですね。

係長 なんだなんだ。ずいぶん引っかけてるじゃないか。二日酔いに。

橋本 だって……、私はそうならないように注意して飲んだのに、あの子の彼氏は酔い潰れるまで飲んで。プレゼンの前日に。

まあ、そういうことだな。

橋本 係長。

係長 なんだね。

橋本 そんな男にあんな彼女がいて、どうして僕には彼女ができないんでしょうか。

係長 おい……悲しいことを言うじゃないか。

橋本 ……（係長を熱い目で見返す）。

係長 気になるな。君にはピッタリの彼女がいつかできるさ。

橋本 ……そうでしょうか。

係長

あの子はね……特殊だよ。あんなぶっ飛んでることができるのは、一部の限られた人だけだ。我々はコツコツと、プレゼンの練習をして、コツコツと練習通りにやるしかないよ。な、橋本くん。そうだら（肩を叩く）

橋本

（感極まって泣く）そんなの理不尽だ！

暗転。